

実践報告

5

大崎市立松山小学校

ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくり

1 実践概要

本校では、各学級に配慮を要する児童が複数名在籍しており、それぞれの児童の特性を理解した上での個別の対応や学習指導の在り方が課題となっていた。また、学力調査等の結果から学校全体として、ほとんどの学年が「思考・判断・表現」の観点に課題を持ち、「主体的に学習に取り組む態度」についても、学年が進むに従って、「粘り強さ」や「主体性」に関する項目での課題が顕著になっていた。そこで、「分かる・できる」喜びを味わう体験を重ね、主体的に粘り強く学習に取り組む学びの姿勢を育てることが大切だと考え、校内研究として算数科をとり上げ、ユニバーサルデザイン（以下、UD）の考え方を取り入れた授業づくりに取り組んできた。授業づくりをしながら、学習を支える学習環境整備や学習習慣形成に関わる学習の土台づくりにも取り組んだ。児童の学ぶ姿勢を育て、学びの基礎を構築しながら、教職員は児童理解のための障害理解やアセスメントの仕方を学び、集団の学びの中での個別の学びの在り方について模索してきた。その上で、通級指導担当者を始めとする全職員で学びがつながる校内体制づくりに努めた。

◆キーワード◆ 授業づくり(集団の学びと個別の学び)、学習の土台づくり、認知特性の理解

2 令和3年度の実践の概要

主な取組	(1) 学習環境整備や家庭学習内容と進め方の共通理解 (2) UD と合理的配慮についての研修 (3) UD の考え方に基づく授業づくり（学習過程の構造化、視覚的な理解に結び付く教材教具の工夫）
成果	(1)について 特別教室も含めて、どの教室も前面の掲示物を整理し統一した。場が変わっても落ち着いて学習に取り組むことができた。家庭学習の内容を発達段階に応じて整理し共通理解することで、積み重ねができ学習の基礎固めに繋がった。 (2)について UD の考え方を生かした授業と合理的配慮を組み合わせることの大切さを理解した。授業実践で UD が生かされた部分、合理的配慮が行われた部分について確認し、それぞれを組み込む授業づくりについて理解を深めていくことができた。 (3)について 学習の流れの提示、既習事項の活用、板書のレイアウトや色遣いの工夫、問題解決方法の手順の提示、共有手段としての ICT の提示などの点で、児童の意欲を引き出し、自発的な取組に結び付けることができた。
課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 認知特性を意識した授業づくり ・ 多様な問題解決方法の提示とそれらを活用する児童の自主的な選択 ・ 児童の力を発揮させるための働き掛けや課題提示の仕方 ・ 話合いの時間の設定と小集団の学習のねらいや交流のさせ方の明確化 ・ 学びにくさを抱える児童の背景要因の把握

3 令和4年度の取組の概要

<p>主な取組</p>	<p>(1) 学習の約束や家庭学習カード等の見直し (2) 学びにくさのある児童への対応の仕方 (3) UD の考え方に基づく授業づくり（課題提示の工夫、既習内容の活用と問題解決方法の提示の仕方、認知特性に配慮した提示の仕方、伝え合いの工夫）</p>
<p>成果</p>	<p>(1) について 学習理解を下支えするものとして、学習ルールや家庭学習の取り組ませ方について振り返り、よりよい学習習慣の形成を目指し全校で統一した取組の積み重ねにより、次年度のスタートがスムーズになった。</p> <p>(2) について 専門家チームの先生方のご指導を基に、日常の対応について、関わりのある教員間で積極的に情報交換を行い、手立てを考え、互いに手立てを基に取り組み、その結果についてまた情報交換を行うようになった。</p> <p>(3) について 既習内容を活用し本時の課題との違いに着目させることで課題が明確になり、めあてを持って学習に取り組むことができた。自分の考えを表す多様な方法の提示、児童の視線の動きを考慮した ICT 機器や補助黒板の配置、視覚的な情報と聴覚的な情報を結び付けた提示などを意識して取り組むことで、分かる・できると感じている児童が増えてきた。また、トリオでの話合いを取り入れることにより自分たちの考えの共通点や相違点に着目できるようになった。</p>
<p>課題点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・情報量に配慮した学習活動や発問の精選と既習内容の扱い方 ・UD の考え方を取り入れながらも児童が主体的に考える意欲を高めるような授業と集団での学びと個別の学びのバランスを考えた授業づくり ・トリオ学習を中心とした学び合いの在り方

4 令和5年度の取組（まとめ）

<p>指導目標</p>	<p>UD の考え方に基づく授業づくりの柱として掲げた、焦点化、視覚化、共有化の3つの柱に手立てを講じ、「分かる・できる」喜びを実感し自ら学ぼうとする児童を育成する。</p>
<p>指導目標に対する 主な手立て</p>	<p>【授業づくりの視点1・焦点化】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習内容を絞る <p>課題提示の仕方を工夫し、課題を明確に捉えさせたり、学習過程の構造化を図り、学習の流れに見通しを持たせたりと意欲を持って学習に取り組めるようにすることで、学習内容の精選を図る。</p> <p>【授業づくりの視点2・視覚化】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習内容をイメージしやすくする <p>教材教具の提示や板書の工夫をするとともに、認知特性を考慮し、視覚的提示と一体化した音声での説明を大切にし、視覚的な理解と聴覚的な理解を結び付けていく。</p> <p>【授業づくりの視点3・共有化】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学びを確認したり深めたり広げたりする <p>授業の中で、ペアやトリオでの学び合い、全体での学び合いの場を設定し、1単位時間の学習内容のまとめや適用問題へのつながりを大切にする。</p>

<p>経過</p>	<p>(1) 第1回授業実践について 6年 算数科「分数の倍」 数直線を活用し、基準量、比較量、倍の正しい関係を書き込ませながら分数で表された数の関係を捉えさせた。基準量（もとにする量）を1で表すことを手掛かりに、基準量と比較量の関係をトリオで話し合わせた。</p> <p>(2) 第2回授業実践について 4年 算数科「角の大きさ」 180度より大きい角度の測定の仕方を180度や360度に着目させ、考えたことを説明させた。角度を示す教具が分かりやすく式と図と説明が一致していた。また、トリオ学習では、図形の特質を考え、同じ方向から見て考えさせたり確認させたりするために、話し合いを横並びで行った。</p> <p>(3) 第3回授業実践について 5年 算数科「倍数と公倍数」 2つの数の公倍数の求め方を考えさせ、2つの数の公倍数は最小公倍数の倍数になっていることに気付かせる学習だった。初めからトリオでの課題解決を試みたが、話し合いが活発になるまでに時間が掛かった。個人で解決の見通しを持つ時間が必要であった。発表時はスクリーンを活用し、発表後も考えを紙媒体で黒板に掲示したことで考え方の比較ができた。</p> <p>(4) 第4回授業実践について 1年 算数科「12-3のけいさん」 繰り下がりのある引き算の減加法を理解させた上での、減々に触れる学習であった。問題場面を捉えやすくするために教科書と同じお菓子の模型を製作し提示することで、学習意欲を引き出した。模型と掲示用ブロックの大きさが対応しており、視覚的な分かりやすさを感じた。ばらから引くメリットを理解させる点で難しさを感じた。</p> <p>(5) 第5回授業実践について 3年 算数科「小数のいろいろな見方」 整数で学んだことを基に小数のいろいろな見方を知る学習だった。280の表し方に倣って2.8の表し方を考える授業構成にした。体験を問題場面に結び付けたり、ワークシートと板書のレイアウトが同じで、対応する数字などを同じ色で示したりすることで、トリオで話し合い、考えをまとめる手掛かりになるようにした。全国学力・学習状況調査等にもしばしば出題される形式で児童にとって経験を積む必要性のある学習ではあったが、難しいと感じた児童は少なくなかった。</p>
<p>成果</p>	<p>ワークシートやノートを板書と対応させるなど、情報の与え方をシンプルにすることを心掛け、児童が課題解決に集中できるようにすることができた。また、ノートや算数コーナーを活用し、児童が必要なときに必要なヒントを得て課題を解決できるように配慮することで、授業の中での情報量のある程度、整理できるようになった。トリオ学習のメンバー構成に配慮することで、話し合いが楽しいと感じ、友達の考えがよく分かるようになったと感じている児童が増えた。</p>
<p>課題点</p>	<p>互いの考えの確認の場や習熟の場など、いろいろな場でペアやトリオでの学び合いを取り入れてきたが、誰もが話し合うことでよく分かったと感じる学び合いの在り方を今後も探っていく。また、集団での学びと個別での学びのバランスを考えたときに、学びにくさを抱えている児童について、何につまづくのかを把握し手立てを講じなければいけない。同時に、分かりやすさを考慮した手立てが知的好奇心を半減させないものとなるようにしていかなければならない。</p>

5 大崎市立松山小学校におけるユニバーサルデザインの授業づくり実践事例

算数での実践を中心に行ってきたが、算数で取り組んだことが、他教科や学校教育活動全般に広げて実践する姿が見られた。

【算数での取組】

- ・既習内容を活かした授業構成をする。本時の課題を明確にするために、既習内容と異なる点に気付かせたり、既習内容を算数コーナー等に掲示したりすることで自力解決、集団解決の助けとする。
- ・学習の流れを示し、見通しを持って取り組むことができるようにする。既習内容⇒課題⇒自力解決⇒共有⇒まとめ⇒適用問題の流れを作り、1つ1つの学習活動のねらいを意識して取り組むことができるようにする。
- ・問題解決の助けとするための半具体物、図、数直線、言葉、式など、考えを表すためのツールをいつでも使えるように、授業の中で示しながら使い方も指導していく。

【全教科での取組】

- ・黒板等に提示する教材教具や掲示物は、できるだけ教科書や児童の学習用具と色や形を近似のものとする。
- ・大型テレビや補助黒板等を活用するときは、児童の視線の動きを考慮して配置する。
- ・ワークシートやノート、板書のレイアウトに配慮し、1時間の学習の流れが見えるようにする。
- ・自力解決した自分の考えを持ち寄って児童同士で共有できたり、さらに進歩させたりできる話合いの場を設ける。(本校の場合は、トリオ(3人組)で取り組んだが、今後は、児童の主体性を生かした柔軟なグループ編成ができることを目指す。)
- ・視覚的な教材を提示した場合には、それを音声で聴覚的に説明する等、認知特性を意識した働き掛けを行う。

【他教科や環境整備等】

一人一人の教員が行ったUDを取り入れた指導実践を事例としてまとめ、教員で共有した。その一例を以下に挙げる。

実践例 | バスケットボールに親しむためのシュートゾーンの活用 【体育】 中・高学年

【目的】 シュートする位置とねらう場所を視覚的に捉えさせることでシュートの成功率をあげ、バスケットボールに親しませる。

【解説】 テープで囲んだ枠をシュートゾーンとして設置する。シュートゾーンにボールを持って入るとシュートを妨害されないというルールを設定する。また、バックボード内にシュートゾーンからねらうポイントを貼っている。シュートゾーンの色に対応したポイントをねらってシュートすると得点しやすくなる。(斜め45°の位置) 学習中のシュート練習にはシュートゾーンからのシュートも練習させ、得点の感覚をつかませる。



【成果】 シュートする場所とねらう場所が明確になることで安心してシュート練習に臨むことができる。シュートゾーンを作ることによって相手に邪魔されずにシュートする機会が増える。周りの児童もシュートをせかさず待つことができる。それによって、多くの児童がシュートをする機会を持つことができた。試合で活躍できない児童も練習の中で、得点する喜びを味わうことができた。

6 「共に学ぶ教育推進モデル事業」について

(1) UDによる授業づくり

- ・児童の変容について

UDを取り入れた授業を行う中に、個別の配慮を組み込んでいった。個別の配慮を必要とする児童にミニ教具やヒントカード等を与えてきたが、他の児童はそれを許容し、自分に合った方法で解くことを大切にしている。一人一人の実態に応じた課題への取り組み方ができてきた。

問題解決をする際に、既習内容を振り返ったり、算数の場合には、図や表、数直線等に表してみたり、ブロックやおはじき等の助けを借りたりと、自ら解決するための方法を選んで取り組むことができるようになった。

- ・授業のUD化

全教員がどの教科の指導においてもUDを意識して授業を行うようになっている。ねらいを達成するために課題を明確にするにはどのようにすればよいか、まとめにはどのように結び付けていけばよいかなど、児童の目線に立って考え、授業を組み立てる習慣が身に付いた。

(2) 小学校、中学校、高等学校の連携体制構築

- ・特別支援教育を推進する校内体制について

通常の学級に在籍する配慮を要する児童については、たくさんの教職員が関わることで、一人の児童への指導を他の児童への指導にも生かすことができ、その指導結果を互いに共有することができるようになってきた。

- ・異校種間の交流について

小中連携の組織があり、学力向上や特別支援教育についても共通の取組項目を設定し、それに対する情報交換等を行っている。共に、UDの考え方を取り入れた環境づくり、授業づくりに取り組んでいるため、同じものを目指しながらの取組ができた。高等学校については、共に学ぶ教育推進モデル事業の研修会等に参加し合いながら異校種の取組を自校の取組に生かし合うことができた。

(3) 研修会やケース会による児童理解

- ・特別な教育的ニーズを必要とする児童生徒理解について

職員室の中で、配慮を要する児童に対する話題が出れば、特別な会議の時間を持つことなくその児童に関わっている教職員が自然に集まり、自分が観察したり、対応したりして知っていることを出し合い、対応方法について担任と同じ目線で考えたり、話し合ったりすることが日常的になった。

- ・外部専門家による知見の生かし方について

児童の行動の背景を観察し探ることが大切であることを念頭に置いて、配慮を要する児童と接してきた。また、一人一人の認知特性を理解することを意識しながら授業を進めるようになった。研修会の度にお話しいただいたことの積み重ねにより、全職員の特別支援教育に関する知識の水準が上がった。通級指導担当者や学級担任との話し合い、また、児童理解研修会等でも、特別支援教育についての基礎的な説明を省き、主訴について話し合いを進めることができるようになった。

＜総評＞

本実践は、他教科と比較しても学力差が大きく現れやすく、また児童の苦手意識も高い「算数科」に、UDの考え方を取り入れて指導・支援に取り組んだことによって、児童および教職員の双方に大きな学びがあったと考える。

特に、聴いて理解する力と見て理解する力のギャップによる学びにくさを生ずる認知特性にも着目して、一人一人の実態に合わせた教材教具、声掛け、環境設定などを試行錯誤しながらも、とても細やかで丁寧な工夫を行ったことで児童の学ぶ意欲を高め、テストの結果などに即座に反映されなかったとしても、学ぶことの楽しさや達成感を、どの学力段階にいる児童も得られた事は、今後の学習の土台を形成する上で重要なポイントであった。

さらに学級集団での学び（UD）に取り組みながら、当然それだけでは支援が届かない個々の児童には個別の支援（合理的配慮）を行い、通常学級内での授業実践において両立させる工夫や具体的な実践の在り方を提示している点も大きな成果である。

そして何よりも重要なことは、本実践に取り組んだ先生方の意識が変わり、認知特性やUD等を取り込んで児童目線での指導や支援の在り方を考えることが、特別なことではなくなったことにあると考える。

（宮城教育大学 教授 植木田 潤先生）

3年間のモデル事業を通じて先生方が着実にユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりを推進されてこられたことを実感しています。ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた指導は、私たちの社会が年齢や性別、得手不得手や障害等の有無に関係なく互いの違いを尊重し、『違い』は『価値あること』『社会をより良くするもの』であることを次世代が理解する最良の機会だと考えます。今回の事業を通じて得た知見を生かし、今後も生徒一人一人が多様性を発揮し、『違い』の集合体が相互に影響し合うことで生まれる素晴らしい育ち合いの場を作ることにご尽力いただければ幸いです。私にとっても貴重な学びの機会をいただき、ありがとうございました。

（公認心理師 菅原 佐和子先生）